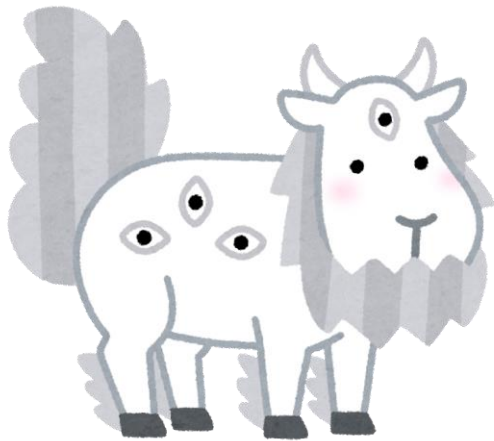


特別展

「東アジア恠異学会 20 周年記念展示
吉兆と魔除け—恠異学の視点から—」

(令和 3 年 2 月 24 日～4 月 14 日)



京都産業大学ギャラリー

ごあいさつ

令和2年(2020)冬にはじまり、パンデミックを引き起こし、現在も収まることのない新型コロナウイルス感染症の災厄を避けるため、アマビエの絵がSNSで拡散し、イラストや商品など多様な形態で人口に膾炙しています。アマビエは、弘化3年(1846)、肥後国(熊本県)の海中に毎夜光るものがあり、役人が確かめに行ったところ、海中からアマビエが出現し、今年から6年間は豊作が続くが、病気が流行するので自分の姿を写して見せるようにと告げて海中に消えたというものです(京都大学附属図書館蔵)。感染症の予防についての医学的な知識の普及した現代社会でも、アマビエに願いを託す心性が生きています。

古来、人は自然災害や疫病など抗うことのできない出来事に出会ったとき、その不安をさけるため、神や仏に祈りを捧げてきました。また、日々の暮らしのなかで、年中行事や人生儀礼など時の節目に儀礼を繰り返すことによって、何事もなく平穏無事な幸せが続くことを願ってきました。そこには、科学や合理性で割り切ることのできない、経験知から生み出された知と技があります。

東アジア恠異学会は、平成13年(2001)4月に京都百万遍の喫茶店で産声を上げた小さな学会です。「恠異」をキーワードに、様々な記録に残されている不思議なコトやモノについての研究を進め、「恠異」の背後に潜む国家や社会、人間の心性を読み解くことに挑戦してきました。

歴史学、文学、民俗学、地理学、宗教学等、特定の学問領域の研究者が集まる学術団体とは異なり、多彩で緩やかな集まりであることを特徴としています。そして、「学際」という位置に立ち、自由自在に学問領域を行き来することから、既成の学問に地殻変動を起こすべくチャレンジをしてきました。この展示では、「吉兆」と「魔除け」をとりあげ、これまでの研究成果をふまえ、人々が願いや祈りを託した文物を通して、祥瑞災異思想やト占技術など東アジアにおける思想や文化を知る手掛かりとします。一つひとつの展示品は身近な暮らしとともにある些細なものですが、そこから広がる東アジア世界に思いをはせていただければ幸いです。

最後になりましたが、学会設立20周年を記念した展示の場をご提供いただいた京都産業大学むすびわざ館の関係者の皆様に感謝いたします。




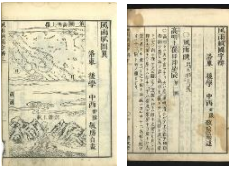







令和3年(2021)2月

東アジア恠異学会 代表








園田学園女子大学 教授

大江 篤

特別展「東アジア恠異学会20周年記念展示 吉兆と魔除け -怪異学の視点から-」 展示資料一覧

No.	資料名	ふりがな	寸法 (cm) * [] は展示する形状	員数	写真	所蔵者
1	『陰陽五要奇書』 河図・洛書図	いんようごようきしよ かと・らくしよず	帙入り横17×縦25.4×厚7 [見開き横28×縦25]	1帙 (全8冊)		個人蔵
2	『明史稿』 范表伝	みんしこう はんちゅうでん	横16×縦25.2×厚1 [見開き横29.5×縦25.2]	1冊		個人蔵
3	『妙法蓮華経』	みょうほうれんげきょう	横13×縦31.5×厚3 [口絵横71.5cm×横31.5]	1冊		個人蔵
4	寺島良安 『和漢三才図会』	てらしまりょうあん わかんさんさいずえ	横18×縦25.5×厚1 [見開き横34.5×縦18]	1冊		個人蔵
5	中西敬房 『風雨賦国字弁』	なかにしたかふさ ふううふこくじべん	横15.8×縦22.7×厚1.5 (二冊分) [見開き横22.7×縦30]	2冊		個人蔵
6	宝暦度年号難陳	ほうれきどかいげんなんちん		1冊		個人蔵
7	『関帝明聖真経』	かんていめいせいしんけい	横13.5×縦25.5×厚1 [見開き横23×縦25.5]	1冊		個人蔵
8	クタヘ図	くたへず	横43.4×縦27.5cm	1点		個人蔵
9	屋代弘賢 『神獣白沢図説』	やしろひろかた しんじゅうはくたくずせつ	帙入り横21.5×縦28.5×厚2.3 [見開き横27.7×縦37.5]	1帙 (全1冊)		金沢学院大学図書館
10	井道景賛「白沢之図」	せいどうけいさん はくたくのず	折りたたみ横21.8×縦30.3 [横28.4×縦79.8]	1枚		個人蔵
11	新田猫	にったねこ	縦108.2×横69.4 (軸含む)	1幅		個人蔵
12	伝谷文晁模・関克明賛 「白沢之図」	でんたにぶんちょうも・ せきこくめいさん はくたくのず	折りたたみ約横30×縦17 [横58.4×縦129.4]	1枚		個人蔵
13	祇園祭のちまき	ぎおんまつりのちまき		3点		個人蔵

14	八坂神社 蘇民将来守	やさかじんじゃ そみんしょうらいもり	長約7cm	1点		個人蔵
15	神戸・平野 祇園神社 蘇民将来のお守り	こうべ・ひらの ぎおんじんじゃ そみんしょうらいのおまもり	直径2.5cm 高さ7.8cm	1点		個人蔵
16	伊勢・宮忠 六角棒	いせ・みやちゆう ろっかくぼう	32mm角×150mm	1点		個人蔵
17	凶荒曆	きょうこうれき		1点		個人蔵
18	『地理風水家相一覽』	ちりふうすいかそういちらん	縦22.2×横15.2[見開き]	1冊		個人蔵
19	『南北相法』	なんぼくそうほう	縦22.0×横15.2[見開き]	1冊		個人蔵
20	『南北相法極意抜萃』	なんぼくそうほうごくい ぬきがき	縦22.0×横15.4[見開き]	1冊		個人蔵
21	『増補呪詛調宝記大全』	ぞうほじゅそちようほうき たいぜん	縦10.9×横15.2[見開き]	1冊		個人蔵
22	『大雑書三世相』	だいざっしょさんぜそう	縦17.8×横11.9[見開き]	1冊		個人蔵
23	『東方朔秘伝置文』	とうほうさくひでんおきぶみ	縦17.5×横11.8[見開き]	1冊		個人蔵
24	『唯一神道名法要集』	ゆいつしんとうみょうぼうようしゅう	縦25.8×横17.6[見開き]	1冊		個人蔵
25	『伽婢子』	おとぎぼうこ	縦21.1×横15.2[見開き]	1冊		個人蔵
26	螢火武威丸（包紙）	けいかぶいがん	縦31.8×横23.6[見開き]	1冊		個人蔵
27	「異形賀茂祭絵巻」	いぎょうかものまつりえまき	1296.0×軸39.0 [箱 43.5×9×8.2]	1本		京都産業大学図書館

28	如勅令独脚神鎮宅呪符版木	じょちょくれいどっきやく しんちんたくじゅふはんぎ	横7×縦25.6×厚2.5	1個		個人蔵
29	如勅令神虎殺鬼鎮宅呪符	じょちょくれいしんこさつきちんたく じゅふ	横17.5×縦26.3cm	1枚		個人蔵
30	太上老君勅令印	たいじょうろうくん ちょくれいいん	横5.5×縦5.5×厚2.2	1個		個人蔵
31	吉祥印	きっしょういん	小横3×縦2.6×厚2.3 大横5.9×縦4.5×厚2.2	2個		個人蔵
32	甲馬・改連真経	こうま・かいはんしんきょう	紙銭横15×縦14.3 甲馬紙横15×縦7.5	2枚		個人蔵
33	甲馬子版木	こうましはんぎ	横13×縦16.5×厚2.5	1枚		個人蔵
34	安産守一式	あんざんまもりいっしき	縦31.3×横5.7×高さ5.4 [箱から出して]	1括		個人蔵

怪異学と「怪異」

怪異学とは、西山克（京都教育大学名誉教授）が平成13年（2001）に、東アジア^{かいがい}怪異学会の創設とともに提唱した新しい学問です。中世史を専門とする西山は、前近代の国家や社会の動向が、「怪異」——超自然的で非合理的な現象や観念と不可分の関係にありながら、現代の歴史学がその研究をないがしろにしてきたことから、怪異の研究の重要性を説きました。そして、前近代の王権が危機管理のために蓄積した先端知識が、やがて社会に拡散・浸透していくと考え、王権と怪異の研究を進めました。

その「先端知識」が、中国古代の祥瑞災異思想、天人相関説です。『漢書』卷56^{とうちゆうじよ}董仲舒伝には、……『春秋』によって過去に照らし合わせてみますと、天と人が互いに関係しあうことは大變に^{おそ}畏れるべきものです。国家が今にも道を失う過ちを犯そうという時には、天はそこで先ず**災害**を出すことで過ちを^{とが}咎めます。それを君主が省みないのであれば、次に**怪異**を出して驚かせ戒めます。さらにそれでも君主が態度を改めないのであれば、そこでとうとう**破滅**がやって来るのです。このことから、天の心が君主を思いやって世の中が乱れるのを防ごうとしている様子が窺えます。……

とあります。天が皇帝の治政の過ちを「災害」「怪異」によって警告するのです。ここでの「怪異」は、怪談やホラー映画に描かれる怖い体験、あるいはアニメや漫画に登場するお化け・妖怪などとは異なります。

この知識を受容した日本では「天」にかわって、神仏の意思（崇り等）として解釈しました。古代では、国家が「不思議なコト」を卜占や宗教的儀礼も含む行政処理により説明し、その一部を「怪



董仲舒
（明）王圻 纂集[他]
『三才圖會』106卷 [7]（人物卷4）、
萬曆37年（1609）序刊
国立国会図書館デジタルコレクション
(<https://dl.ndl.go.jp/>) より転載

異」と名づけて、対処を行うことで危機管理を行いました。特定の現象を国家が「怪異」と認定するものであり、社会で日常的に用いられる言葉ではなかったのです。

中世になると、「怪異」は朝廷・幕府・寺社などの勢力がそれぞれ説明するようになります。ところが、室町時代には、社会の大きな変革とともに、それらの勢力は「怪異」を説明する機能を喪失し、「怪異」が社会に噴出します。江戸時代になると、知識人たちが「怪異」を再解釈するとともに、娯楽化していきます。明治時代以降は、科学的知識と「怪異」が拮抗し、やがて個人的な恐怖の対象となり、現在私たちが用いる意味での「怪異」となっています。

このように怪異学では「怪異」という言葉への厳密なアプローチと時代や社会によって異なる意味を内包していることを明らかにしてきました。

（大江 篤）



史書に見える「怪異」の二文字
東アジア怪異学会編『怪異学入門』
（岩田書院）表紙より

吉兆と祥瑞

「祥瑞」は、「瑞祥」や「瑞応」などとも言い、帝王の徳治（徳による教化で世を治めること）や天下太平などに応じて、天が下す吉兆、つまりおめでたいきざしのことです。具体的に言えば、めずらしい天文・気象現象や珍奇な動植物の出現などといった稀有なモノゴトを指します。例えば、今回展示している神獣白沢（下図）なども、『瑞応図』に「賢君の徳 幽遐に及べば則ち出づ」とあるように、本来は祥瑞の一種（瑞獣）でした。



神獣白沢（伝谷文晁模・関克明賛「白沢之図」）
個人蔵

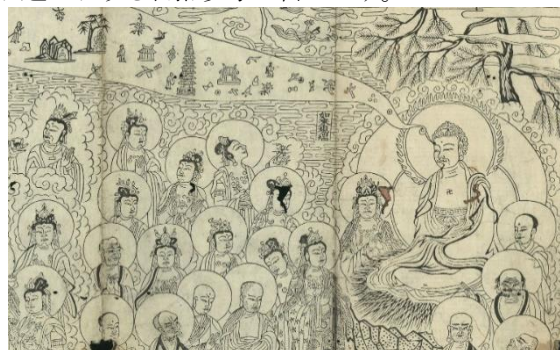
また、祥瑞が吉兆を意味するのに対して、凶兆を意味する災異（災害・怪異）があります。前漢の董仲舒によれば、災異は天が君主に下す警告とされますが、不吉な未来を告げる予兆とも考えられました。

このように正反対の意味を持つ祥瑞と災異ですが、実は表裏一体の概念とも言えます。なぜなら、稀有なモノゴトに遭遇したとき、人はそれを吉兆とも凶兆とも判断しうるからです。吉兆と凶兆の境界は曖昧であり、ときに一つの現象をめぐって、それを吉兆と捉えるか、あるいは凶兆と見なすかで議論が起こることもありました。例えば、災異記録である『漢書』五行志をひもとけば、凶兆を吉兆と解釈して後世のそしりを受けた例が見られます。また、後漢の王充などは、一つの怪異を

めぐって、当事者の立場により凶兆と吉兆が両立する事例を挙げていますし、「それ瑞応は災変（災異）のごとし」（『論衡』講瑞篇）とも述べています。

こうした事情からか、六朝時代に入ると、『宋書』符瑞志や『瑞応図』など、祥瑞を見極めるための書物が作られるようになりました。さらに『唐六典』巻4では、祥瑞はその種類に基づき、大瑞・上瑞・中瑞・下瑞にランク分けされました。大瑞が現れた場合には即座に上奏し、それ以外は年末にまとめて報告するきまりになっていました。先の白沢も大瑞の一つに数えられます。ただし大瑞すべてが必ずしも実際に現れ、史書に記録されたわけではありません。史書に見出されるのは、同じく大瑞に含まれる慶雲（五色に輝く雲の出現）や河水清（黄河の水が澄みわたる）といった一部の現象でした。これらは稀有ですが、ときおり起こりうる自然現象と言えます。

さて、漢代以来、祥瑞は儒教理念に包括され、国家制度の中で機能してゆくことになりました。とはいえ、祥瑞自体は決して儒教理念や国家制度の中のみ位置づけられるわけではなく、その思想・文化は道教や仏教の中にも見いだすことができます。今回展示している『妙法蓮華経』の口絵（右図）は、序品



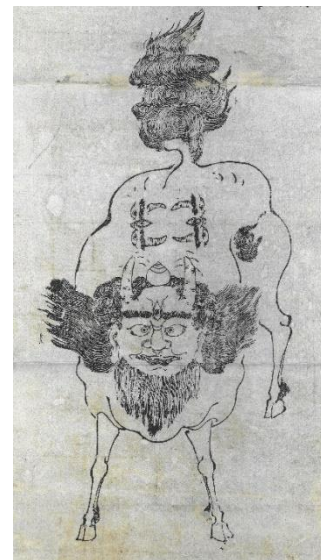
如来現瑞（『妙法蓮華経』口絵）個人蔵

の一場面を描いたものですが、仏教における祥瑞文化の一例を示すものと言えます。また同じく展示品の『明史稿』^{みんしこう} 范衷伝^{はんちゆうでん}では、一官吏が実践した孝行に対し、天が二つの祥瑞を下したことが述べられています。つまり祥瑞は、天命を受けた帝王のみならず、一個人の元にも現れると考えられたということになります。これなども儒教を背景として社会通念化された祥瑞文化の一例と言えるでしょう。

(佐々木聡)

白沢からクタベへ

「白沢」は神獣であり、話すことができ、天下の11520種の鬼神(悪鬼やもののけ)のことであり、それを黄帝に教えたとされます(『軒轅本紀』^{けんえんほんぎ})。鬼神のことに通じた白沢に「辟邪」^{へきじや}の力を信じて描かれたのが白沢の図であり、中国では唐代のころから定着していきました。日本では『延喜式』(平安時代中期編纂)に祥瑞の一つとして上げられたのが初出ですが、特に江戸時代中期以降に流行します。例えば、戸隠山や八海山などで参詣客等へ頒布された「白沢避怪図」や、悪い夢を見ないため、諸々の邪気を避けるために枕元に掲げられた白沢の図などがありました。また、旅の心得を記した『旅行用心集』(文化7年(1810)出版)所収の「白沢の図」では、懐中すれば「山海の災難病患をまぬがれ開運昇進の祥瑞ある」と招福・攘災をうたうなど、魔除けとして民間に流布しました。



白沢 (戸隠山白沢避怪図) 個人蔵

白沢は古くは獣の形であったものが、後に人面獣身が主流となりました(右図)。同様に人面獣身の姿から白沢とよく混同されるのが「クダン(件)」です。本来、クダンは文書などに用いられる「如件(件の如し)」の語句から、「まちがいないこと、ただ



クタベ (大阪府立中之島図書館所蔵『保古帖』)

しいこと」の象徴とされ、クダンの言うことは必ず当るとされました。同じく人面で予言する存在として「神社姫」^{しんじやひめ}がいます。文政2年(1819)に疫病が蔓延する中、流行した瓦版において、神社姫は吉事と凶事を予言し、凶事を逃れる対処方法を示しています。これは護符的機能を有するものでした。しかし、同時期によく似た予言をしたクダンは、対処方法を語ったかどうかは不明です(『密局日乗』文政2年5月13日条)。

これ以降、クダンは予言という属性を取得しますが、文政10年(1827)から翌年に掛けて、人面獣身の「クタベ(クタへ、クダベ、ドダクとも)」が流行します。これらを掲載した瓦版は「件」を唐名(中国風の名称)とし、「クタベ」

などは和名^{わめい}と主張しました。クタベは疫病を予言した上、その姿を見ることにより難を逃れると教示しました。高力猿猴庵^{こうりきまゐんこうあん}の日記によると、尾張ではその姿を描き、家の壁などに貼り置く人が多くいたといえます。クタベのパロディ的な存在として「スカ屁^べ」の瓦版がありますが、それはクタベ自身がクダンから派生した存在であったことを示唆します。

白沢とクダンは姿の類似性から混同されました。予言をするクダンは本来難を逃れる方法を教えるという要素を持っていませんでしたが、既に魔除けとして流布していた白沢の存在があったからこそ、難を避ける属性を持つクタベがそこから生まれたのでしょう。

(笹方政紀)

祥瑞と年号

年号(元号)を変更することを「改元」といいます。そのうち、日本最初の年号「大化」や、「平成」「令和」のように天皇の即位とともに行われたものは「即位改元」(代始改元)と呼ばれ、「白雉」「大宝」などのように珍しい事物が発見・献上されたことによる改元は「祥瑞改元」と称されます。また災害に際して年号を改めることを「災異改元」、暦学で変革が起こるとされる年の改元を「革年改元」と呼びます。



養老改元の由来となった「養老の滝」
(好華堂野亭 著[他]『扶桑皇統記図会』)
国立国会図書館デジタルコレクション
(<https://dl.ndl.go.jp/>)より転載

「祥瑞改元」は中国の「祥瑞災異思想」にもとづくもので、皇帝がよい政治を行っていた場合は、この世界の支配者である「天」から祥瑞が下され、悪い政治を行えば災害・怪異が示されるというものです。日本でも7世紀から8世紀にかけて、天皇の徳を示すものとして、珍しい動物(白雉)や金属(和銅)、自然現象(養老)などの祥瑞の出現による改元が行われました。ただ、その場合は、中国本来の「天」ではなく、神仏が示すものとされていました。年号はそれ自体が、未来をよきものとして寿ぐ役割を持っていたのです。



宝曆改元難陳 個人蔵

江戸時代の宝曆改元に際して行われた難陳(年号案の検討)の記録。年号案への批判(難)と弁護(陳)の応酬が行われた。

しかし、祥瑞改元は平安時代以降、重視されなくなります。その一方で、年号をよき未来を約束し、悪しき過去を払拭するものとして、文字の選択に公卿・学者たちの知識が動員される傾向が強くなってきました。「年号定」は公卿たちによる年号の文字を決定する会議であり、そこで行われる議論は「難陳」と呼ばれます。年号定と難陳は、「明治」改元の際に廃止されるまで続いてゆくことになります。

(久禮旦雄)

中国の魔除けとまじない

中国では、古来より不吉なきざしや悪しきものを退けることを「辟邪」と言いました。辟邪には様々な方法がありますが、「吉祥物」、つまりラッキー・アイテムを置くこともその一つです。そもそも「辟邪」という言葉も、古くは神獣の名前でした。例えば『急就篇』巻3には、「射魃・辟邪は群凶を除く」とあります。また、古代の辟邪をかたどったとされる石像が現在まで伝わっています。こうした辟邪の霊験を持つ神獣（辟邪神獣）は、元祖である辟邪のほかにも、数多く生み出されました。今回展示している白沢なども辟邪神獣としての一面を持っています。

また呪符も辟邪に広く用いられました。呪符の使い方は、おおよそ貼る、帯びる、飲むの三通りです。このうち、我々にとって最もなじみ深いのは、鎮めたい場所に貼るという方法でしょう。これは日本のお札の使い方とそれほど違いはありません。また、帯びるというのも呪符がお守り（護符）のようなものだと思えば、分かりやすいでしょう。最後の飲むというのは、焼いて灰にし、水に溶かして飲むという方法です。これは元をたどれば、道教の源流である、後漢末の太平道の時代から行われていたようです。『三国志』裴松之注に引く『典略』には、「太平道では、師が九節の杖を持ち符を用いてまじない、病人にひざまずいて頭を地面にたたきつけさせ、あやまちを思い浮かべさせ、呪符を溶かした水を飲ませる。」とあります。

そもそも呪符というものは、神仙世界もしくは冥界の文書を模したものが多ようです。例えば今回展示しているベトナムの呪符も、神虎や独脚神と言った鬼神に、家々の不吉を鎮めよ、と命じる「勅書」の体裁を取ります。また文書には印（判子）が付きものですが、呪符にも押印してあるものが少なくありません。今回展示している「太上老君勅令」と題した木印（右図）も、一見すると呪符のようにも見えますが、実は様々な呪符が効力を発揮するために押される法印なのです。道士がこの法印を押すことで、その呪符（文書）は最高神である太上老君の勅命となり、鬼神たちを従わせることができると考えられました。



現代ベトナムの太上老君勅令印 個人蔵

(佐々木聡)

日本近世の魔除けとまじない

近世になると平和の時代の到来とともに、盛んに寺社への参詣を一種の「遊び」として行うようになります。同時に、そこでは多様な個の不安や願望にこたえるために、寺社は次々と多岐にわたる御利益が作り上げられていきました。寺社では、個々の由緒や神仏の霊験をふまえ、様々なご利益をうたった護符や縁起物などを授与するようになっていきます。

一方で、信仰の世界は寺社内部にとどまっていたわけではありません。出版文化の発展にともなって、仏教や神道、俗信に関する知識が出版物として広まっていきました。秘伝に属していたはずの吉田神道や修験道に関する書物も刊行されていきます。

また、専門的な知識や技術者の間で秘匿され、継承されていた家相・人相などの占いやまじないなどの技法書、入門書も出版物として誰しもが手に入れうる環境が整っていきます。『増補呪詛調宝記大全』(下図)のような呪符やまじないの書物は繰り返し、版を変えて増補されて類書が刊行されました。

そうしたなか、地域社会の知識人などは、『東方朔秘伝置文』や『大雑書三世相』といった書物により、田畑の作付けなどを指導するようなどころもあらわれます。禁忌などの民俗知識も、このような書物を介して形成されることがありました。

近世は、宗教知識が「世俗化」し、多様な回路を通して浸透していった時代であるということができます。

(村上紀夫)



『増補呪詛調宝記大全』に見える呪符とまじない 個人蔵

蘇民将来と疫病よけ

『釈日本紀』巻7に引用されている『備後国風土記』逸文に、疫隅社^{えのくましか}の縁起として、次の説話が記されています。

昔、北の海に住んでいた武塔神^{むたのかみ}が、南の海神の娘のもとに出かける途中、二人の兄弟に宿を乞いました。兄の蘇民将来^{そみんしょうらい}はとても貧しく、弟は裕福で大きな家に住んでいました。弟は惜しんで家を貸そうとはしませんでした。一方、兄は粟の茎で編んだ座布団をすすめ、粟飯と粟酒などを出してもてなしました。

数年が経ち、武塔神は八人の子神を連れてその地を再び訪れました。そこで、「私は、以前受けた恩に報いようと思う。あなたの子孫は家にいるか」と尋ねました。蘇民将来は「私の娘と妻とが家におります」と答えました。すると武塔神は、「茅の輪^{ちのわ}をその娘の腰に着けさせよ」と言います。そのとおりに娘の腰に茅の輪を着かせたところ、その夜に娘一人を除いて、その土地の人々はことごとく殺され滅ぼされてしまいました。

武塔神は、さらに「私の正体は速須佐能雄能神^{はやすきのをのかみ}である。今後、疫病が流行することがあれば、蘇民将来の子孫と言って茅の輪を着けていれば、死を免れるであろう」と言いました。

この説話は、疫病消除の「茅の輪」の由来譚となっていますが、「蘇民将来の子孫」が呪文となり、疫病除けの護符に使用されます(右図)。また、武塔神はスサノオノミコトと名乗っていますが、後には祇園社(八坂神社)の牛頭天王と習合し、その信仰は複雑に展開していきます。

(大江 篤)



神戸・平野の祇園神社の蘇民将来のお守り 個人蔵

展示解説

凡 例：

- 一、年代表記は和暦のあとに（ ）で西暦を示した。
- 一、資料名、原資料に付されたもののうち、簿冊および書籍は『 』、一枚ものは「 」とし、内容に応じて所蔵者が付けたものは括弧なしとした。
- 一、展示解説の執筆者はそれぞれの末尾に（ ）で示した。
- 一、資料の所蔵者名は敬称を略した。

1 『陰陽五要奇書』河図・洛書図 個人蔵

乾隆^{けんりゅう}55 (1790) 年^{らくしんどう}樂真堂刊。河図・洛書は、『周易』の繫辭上傳に「天は象^{しるし}を垂れて吉凶を現し……河は『図』を出だし、洛は『書』を出だせば、聖人これに則^{のつと}る。」とあるように、代表的な祥瑞の一つとされた。その理解は様々であるが、展示の『八宅明経』(『陰陽五要奇書』所収)には、抽象図像化された河図・洛書が見える。●は陰数(2・4・6・8・10...)、○は陽数(1・3・5・7・9...)を表しており、河図は1~10を五行に、洛書は1~9を九宮にそれぞれ配当し、象数の持つ神秘性を表している。(佐々木聡)

2 『明史稿』范衷伝 個人蔵

雍正年間(1723~35)敬慎堂刊本(忍藩・進修館旧蔵本)。范衷は永楽19(1421)年の進士で、後に天下第一の廉吏(清廉な官吏)と評価された。その伝の末尾には「性は至孝にして、父の墓に廬^{いおり}すれば、瓜^{れんし}連枝を生じ、白兔三びき有りて、墓の側に馴擾す。郷人其の行いを高しとせざる莫^なし。」とあり、孝行が天に通じ、連枝(二本の枝が繋がって一つとなること)や白兔などの瑞祥が現れたという。(佐々木聡)

3 『妙法蓮華経』口絵 個人蔵

年代不明。鳩摩羅什訳『妙法蓮華経』の刊本の一つ。口絵は序品・方便品に見える三場面「如来現瑞」「弥勒疑解請問文殊」「舍利弗三請如來說法」を一面に描く。このうち「如来現瑞(如来瑞を現す)」は、仏陀が説法のおり六種の瑞祥を現したことを言うが、ここでは特に第六「放光瑞」、つまり眉間の白毫相から放たれた光が六道世界を遍く照らす場面を描く。展示品は、出版年代は不明だが、口絵に「程坊の余円良刊を助く」とあり、巻一冒頭に「甌寧県慈恵里余墩坊の信善余文忠、同室たる劉明の娘抽資して彫刻す。」とあるように、在家信徒の喜捨浄財による民間出版の状況を伝える。(佐々木聡)

4 寺島良安『和漢三才図会』 個人蔵

正徳5(1715)年跋刊本。本書は江戸中期の医者寺島良安(1654~?)が中国の『三才図会』に於て編纂した絵入りの類書で全105巻。展示品はその巻三に相当し、天象全般として、暈・流星・彗星・虹蜺・雲・霽・霞・電・雷・雷斧・風・雨・梅雨・液雨・天泣・恠雨・霽・雪・霰・霰・霽・露・霜・霧などの諸項目を載録する。またこれらと並んで花信風図・

ひよりのよしあし ほんちやうのりご かぜのほうかくをもつてふるふらぬをしる
四時占候俚語・本朝俚語・以風方角知雨晴など諸項目がある。いずれも天人相関思想および
しょうずいさいいしそ
祥瑞災異思想を背景とした和漢の古典籍や俚語の知識が述べられる。(佐々木聡)

5 中西敬房『風雨賦国字弁』 個人蔵

安永6(1777)年刊。江戸中期の暦数・天文学者である中西敬房(?~1781)の編述。天文気象を歌った『風雨賦』に和文による注解と55枚の図をつけたもの。風雨賦は明・王鳴鶴の兵書『登壇必究』に引く『風雨賦』に拠ったことが序文に見える。天文気象図を収録する乾冊(『図翼』)と、本文・注文のみの坤冊に分かれる。天象に基づき気候をうらなう占辞が多いが、「君正しく臣忠なれば先づ風ふきて後に雨ふる」「上に驕り下も詔へば始めに雨ふりて終りに風ふく」のように祥瑞・災異にかかる占辞も見える。(佐々木聡)

6 宝暦改元難陳 個人蔵

寛延4年(1751)10月の「宝暦改元(年号の変更)」に際して行われた公卿たちによる「年号定」(改元についての会議)における「難陳」(年号案の検討)の記録。宮内庁書陵部に壬生家所蔵の「宝暦改元一会」が所蔵されており、その一部の写しと考えられる。「文長」「安長」「天明」「宝暦」「明和」の五案が検討されており、最善の案として「宝暦」が選ばれた。(久禮旦雄)

7『関帝明聖真経』 個人蔵

光緒10(1884)年怡怡堂刊。本書は関羽を神格化した民間信仰の経典であり、善行を勧める「善書」の一種。冒頭の識語に「経内に説く所、人能く印送すれば、諸疾侵さず。家宅に供奉すれば、妖魅塵と化す。舟中に供奉すれば、風波即ち平らぐ。行人此を佩すれば、路保ちて安寧。…」とあり、広く辟邪(魔除け)に用いられたことが窺える。(佐々木聡)

8 クタへ図 個人蔵

文政10年(1827)の筆か? 現在、クタベの類の史料は瓦版、肉筆、随筆など9点把握されている。その中でも、「唐名 件」の表記があるかわら版「クタベ(倭郷)」(中之島図書館蔵)と記述が類似しており、絵図も一見別物のようであるが、鋭い爪や、背中の目など特徴的な要素には同一性が見られる。そのため、年代の記述が無い瓦版「クタベ」の発行年の特定にも有効性が認められる。また、「松平遠江守」の名は他のクタベ類には見られず、貴重性を強調する権威付けと思慮される。(笹方政紀)

9 屋代弘賢『神獣白沢図説』 金沢学院大学図書館

18世紀末~19世紀前半成書。屋代弘賢(1758~1841)は江戸後期の能書家、学者。同一の筆跡で書かれた抄本が国立国会図書館に所蔵されており、また宮内庁書陵部・池底叢書には同一筆跡で内容を増補した『白沢考』が収められる。これらはおそらく弘賢が編纂していた『古今要覧稿』に収録するために書かれた原稿とその副本であろう。その内容は、神獣白沢に関する和漢の典籍・絵画を集めたもので、展示品の一葉には、清代に描かれた獅子型(ただし偶蹄)の白沢を載録する。(佐々木聡)

10 井道景贊「白沢之図」 個人蔵

江戸後期？ 江戸時代の白沢図は、人面牛身に九眼（両目と額の三眼、両脇それぞれにある三眼を合わせて九眼）で描かれる場合が多いが、この白沢は脇に四眼を持つ珍しい姿で描かれる。四眼は追儺儀礼に登場する方相神とよく似ており、ともに辟邪の靈験を持つ両者を組み合わせたものか。習合というよりも一種の諧謔と考えられる。讃文の落款には、「七十五翁井道景謹書／[元右之印]」とあるが不詳。また賛の右にある「風定花猶落／鳥鳴山更幽」印、落款下の「修竹不受暑」印はいずれも当時流行した禅語。（佐々木聡）

11 新田猫 個人蔵

文政5年（1822）。新田徳純（1777～1825）筆。上野国の交代寄合の新田岩松氏は、18代の徳純から21代の俊純まで代々の当主が領民などのもとに依じて数多くの猫の絵を描いていた。この猫の絵は「新田猫」と呼ばれ、鼠除けになるとされて養蚕地帯を中心に広まった。（村上紀夫）

12 伝谷文晁模・関克明賛「白沢之図」 個人蔵

文政13（1830）年刊。落款によれば、絵は伝谷文晁（1763～1841）の模写、讃は関克明（1768～1835）の筆という。二人は耽奇会などを通じて、幕府祐筆の屋代弘賢と親交があり、展示品の図・讃も弘賢の『白沢考』（宮内庁書陵部所蔵）の一部と一致する。当時あまり知られていなかった中国風の白沢（虎面鱗身）を摺り物とした貴重な一例と言える。なお文晁の落款に「文政庚寅（13年）」とあり、上梓されたのも概ね同年と考えられるが、この年は克明の息子で、文晁・弘賢とも親交の深かった関思亮が35歳で夭逝した年でもある。（佐々木聡）

13 祇園祭のちまき 個人蔵

祇園祭の際に山・鉦で頒布される厄除けのちまき。それぞれの山鉦町によって、デザインは異なるが、「蘇民将来子孫之者也」と記したお札がついている。自宅に持ち帰り、家の軒に飾る。展示品はそれぞれ岩戸山・木賊山・占出山のもの。（大江 篤）

14 八坂神社 蘇民将来守 個人蔵

京都・八坂神社（祇園社）の「八角木守」。毎年その年の干支が八角ある本体に彫られている。13のちまきとともに家の軒につると言われている。（大江 篤）

15 神戸・平野 蘇民将来のお守り 個人蔵

神戸市兵庫区にある祇園神社で授与されるお守り。この神社は、貞観年間（859～877）に播磨国広峯神社の牛頭天王が山城国白川（現、八坂神社）に遷座する際、書写山で修業していた徳城坊阿闍梨が居住していた縁で神輿をとどめたことから創祀されたと伝えられる（祇園牛頭天王御由来ほか）。この地には温泉があり、接待の場としての料亭や旅館があったことから、芸者が髪飾りとしてつける紙繕りの蘇民将来のお守りもある。（大江 篤）

16 伊勢・宮忠 六角棒（蘇民将来） 個人蔵

伊勢、志摩地方では、家の門口に一年中しめ飾りを飾る。その中央には「蘇民将来子孫家門」や「蘇民将来子孫門」と書かれた木札が下げられている。松下社（三重県二見町松下）は「蘇民の森」ともいわれ、毎年12月に「蘇民将来子孫」と書いた桃符を配布し、人々はそれを注連縄に吊るして厄を逃れると伝えている。このように蘇民将来は、伊勢、志摩の民俗として定着しているが、伊勢神宮横のおかげ横丁の神具店、宮忠ではしめ飾りだけではなく、六角棒の蘇民将来が販売されている。そこにはドーマン・セーマンの呪符が記される。

（大江 篤）



17 凶荒暦 個人蔵

明治13年（1880）、山口県会において「凶荒貯蓄」（飢饉に備えての備蓄）が議論された際に参考資料として印刷されたもの。『日本書紀』にみえる崇神天皇・垂仁天皇の時代から孝明天皇の嘉永3年（1850）までの飢饉を列挙し、およそ1900年の間に52度の飢饉が起こっていることから、約30年に一度大飢饉が起こると予想する。

国立国会図書館の白井文庫（植物学者白井光太郎の旧蔵書によるコレクション）所蔵の写本「凶荒暦」の前半部分が印刷されたものと思われる。（久禮旦雄）

18 『地理風水家相一覧』 個人蔵

天保5年（1834）刊。大坂で活躍した易占家で家相家の松浦東鶏の書。土地や家屋の方位による吉凶を記す。中国から伝来した風水は、近世日本で家相として独自の発展をとげる。松浦東鶏とその甥の松浦琴鶴が多くの家相に関する著作を刊行したことが、家相の隆盛をもたらしたとされる。（村上紀夫）

19 『南北相法』 個人蔵

享和2年（1802）年序。近世後期、大坂阿波座生まれの観相家である水野南北による人相見の書。水野は観相家として「諸国ヲ歴游」して、経験を積むなかで「古人・今人ノ言ザル所ヲ得タリ」といい、「日本相道中祖」を名乗った。水野は、多くの門人を育て、その後の観相の基礎を築いたといわれている。（村上紀夫）

20『南北相法極意抜萃』 個人蔵

嘉永4年(1851)、河内屋徳兵衛・近江屋平助刊。文化9年(1812)の自序がある。節食が開運をもたらすとした『南北相法脩身録』全4冊から、飲食に関する事項を抜粋したもの。「食の多少」が「富貴貧賤」と深く関わりと主張する。水野の節食開運説は、その後の健康法などにも多くの影響を与えた。(村上紀夫)

21『増補呪詛調宝記大全』 個人蔵

安永10年(1781)菊屋喜兵衛刊。目的別に呪符の書き方やまじないなどを一覧した書。元禄12年(1699)に刊行された『呪詛調法記』と続編の元禄14年(1701)『陰陽師重宝記』を合綴した物。その後も天保13年(1842)に『新撰呪詛調宝記大全』が刊行されており、近世を通してこうした書物の需要があった。本書には「鳥家へはいる時」などの些事から、各種の病気、「狐憑き」など約350種に及ぶ多様なまじないが掲載されている。生活の中に呪術が根付いていたことがうかがえる。(村上紀夫)

22『大雑書三世相』 個人蔵

近世、江戸吉田屋文三郎刊。暦・占い、吉凶に関する書物。「歳徳神」「八将神」「金神」「土公神」などの方角をはじめ、厄年などや多様な吉凶に関する雑多な知識が掲載されている。こうした書物は寛永9年(1632)のものが最古と言われ、その後も増補を繰り返し百科事典的な要素も持つ多様な情報を掲載した物が相次いで刊行されていた。こうした書物を通じても禁忌などの民俗知識が形成されていった。(村上紀夫)

23『東方朔秘伝置文』 個人蔵

明治22年(1889)金田仙吉刊。若山道人の序文がある。冒頭は「甲子の年」は二、三月に水があり、八月に雨が降るなど、暦干支による年間の天候などが記されている。また、日の出の様子から「天下国家」の平安を予測したり、月の姿から飢饉などを予測するなどの方法が記されている。地域によっては、こうした書物により、年の初めに農業の計画を立てていたところもあったといい、暦占書が民間に受容されて民俗となっていくことがあった。(村上紀夫)

24『唯一神道名法要集』 個人蔵

近世(刊期不明、17世紀か)。唯一神道に関する事項を問答形式で記述した吉田神道の基本文献。ト部家に伝わった元本宗源神道を開闢以来の「唯一神道」とし、儒仏道の三教を排した。平安時代のト部兼延作とされているが、実際には兼延に仮託した吉田兼俱の偽作とされている。(村上紀夫)

25『伽婢子』 個人蔵

近世(刊期不明、17世紀か)。浅井了意による仮名草子。中国の怪異小説『剪灯新話』などをもとに日本を舞台にした物語に翻案した短編怪異小説集。江戸時代における怪異小説、怪談文学流行のきっかけとなった作品。展示箇所は「屏風の絵の人形踊り狂う」の一場面。室町幕府の管領・細

川政元の枕元の屏風の人形が抜け出て風流踊りを踊った怪異は、彼が風呂場で暗殺される凶兆だったという内容。(村上紀夫)

26 螢火武威丸(包紙) 個人蔵

近世。螢火武威丸は昌運丸ともいい、代々陰陽頭をつとめた土御門家が製造していた菓。(村上紀夫)

27 「異形賀茂祭絵巻」 京都産業大学図書館蔵

賀茂祭行列を、異形のもの行列として表現した絵巻。復古大和派の祖とされる江戸時代後期の絵師・田中訥言が妙法院宮の依頼を受けて描いた一巻が出光美術館にあり、この絵巻には出光美術館蔵本と同じ「異形賀茂祭 法橋訥言図之」という奥書と、続けて「安政三年丙辰正月廿九日写 久緑齋春松」の落款と二印が確認できる。安政3年(1856)に出光美術館蔵本を写したものと思われるが、久緑齋春松についてはどのような人物かよくわかっていない。(久禮旦雄)

28 如勅令独脚神鎮宅呪符版木 個人蔵

29 如勅令神虎殺鬼鎮宅呪符 個人蔵

平成27年(2015)にハノイで購入。現代ベトナムの職人による呪符版木とその摺り出し。いずれも道教呪符の流れを汲むと見られる形式をとり、ベトナムで広く信仰される独脚神(中央の図像)や神虎に命じて邪鬼を殺し、宅中を鎮めさせる意味が込められている。28には日本や中国でよく知られる九字が見えるが、両方に見える「𠄎」などもベトナム特有の一筆書きの九字と考えられる。作製者によれば、こうした呪符版木は占い師が購入していくとのこと。(佐々木聡)

30 太上老君勅令印 個人蔵

平成27年(2015)ハノイ市内で購入。道教(特に正一派など)で用いられる法印の一種。法印は天界へと送る章疏などに用いられるもので、要するに現世で公文書に押される官印にあたる。その背景には現実の官僚機構を模した道教の神界観念がある。太上老君は老子を神格化した道教の最高神の一人。また、この「太上老君勅令」印は現代の道士が用いる「太上老君鎮宅七十二道符」などの呪符に押印されることで、呪符が効力を発揮するともされ、ここから呪符が神界の公文書であるという見方も可能となる。(佐々木聡)

31 吉祥印 個人蔵

平成29年(2017)にネパールで購入。木製の吉祥印の一種か。双魚は中国でも吉祥として用いられるが、ネパールでは魂の自由を象徴するとされる。もう一つの印は、悪魔を退ける印相Bhutadamara Mudraに男女のシンボルである陰陽(所謂太極図)などを組み込んでいる。(佐々木聡)

32 「甲馬」・「改連真経」 個人蔵

令和元年(2019)に台北で購入。台湾の甲馬(紙)は、紙銭(祖先や鬼神が使う冥界の通貨)の

一種とされ、鬼神に献上する騎馬や武具などの絵が描かれる。また「改連真経」は、厄運を身代わりに転嫁する儀礼において、身代わりとなる男女の姿を印刷した紙と共に用いられる。改連真経には、「この改連真経は過去の年月日に受けた人の呪罵^{ののしり}を改め、さらに災いを消去し、禍を改めて福に変えることができる」とある。(佐々木聡)

33 甲馬子版木 個人蔵

20世紀? 雲南省^{うんなんしょう}で使用されていた神像呪符「甲馬子(紙)」の版木。雲南の甲馬子には鬼神の姿が描かれたものが多く、当地で信仰されてきた多様な鬼神を伝える資料である。川野明正氏によれば、描かれた鬼神に何某かの祈願した後で紙銭とともに焼かれるという。展示品は、両面にそれぞれ「五道猖王^{ごどうしょうおう}」と「樹神^{じゆしん}」なる鬼神が彫られている。(佐々木聡)

34 安産守一式 個人蔵

宝暦3年(1753)か。二月堂・地藏院の守り札、東大寺龍松院の腹帯、桂女の「あんさんのまもり」が箱に納められる。いずれも安産祈願にかかわるもの。桂女の守り札の包紙には「宝暦三年酉五月吉日」と記されている。桂女は宝暦3年(1753)から安産・疱瘡除の祈祷札の配札をはじめている。(村上紀夫)

【参考文献】

大江 篤:

- ・今堀太逸「牛頭天王と蘇民将来の子孫」(『本地垂迹信仰と念仏:日本庶民仏教史の研究』法蔵館、1999年)
- ・上田市立信濃国分寺資料館編『蘇民将来符:その信仰と伝承(第3版)』(上田市立信濃国分寺資料館、2006年)
- ・小池淳一「蘇民将来:牛王天王信仰の展開と伝承」(『国文学:解釈と鑑賞』69-11、2004)
- 上代文献を読む会編『風土記逸文注釈』(翰林書房、2001年)
- ・東アジア恠異学会編『恠異学の技法』(臨川書店、2003年)
- ・東アジア恠異学会編『亀ト:歴史の地層に秘められたうらないの技をほりおこす』(臨川書店、2006年)
- ・東アジア恠異学会編『恠異学の可能性』(角川書店、2009年)
- ・東アジア恠異学会編『恠異学入門』(岩田書院、2012年)
- ・東アジア恠異学会編『恠異を媒介するもの』(勉誠出版、2015年)
- ・東アジア恠異学会編『恠異学の地平』(臨川書店、2018年)

久禮旦雄:

- ・所功・久禮旦雄・吉野健一『元号:年号から読み解く日本史』(文春新書、2018年)
- ・所功・久禮旦雄・吉野健一『元号読本:「大化」から「令和」まで全248年号の読み物事典』(創元社、2019年)

笹方政紀：

- ・熊澤美弓「白澤避怪図を広める人々—山岳信仰と白澤避怪図—」（『愛知県立大学文字文化財研究所紀要』3、2017年）
- ・高力種信「猿猴庵日記」（原田伴彦編『日本都市生活史料集成 四 城下町Ⅱ』、学習研究社、1976年）
- ・笹方政紀「護符信仰と人魚の効能」（東アジア恠異学会編『恠異学の地平』臨川書店、2018年）
- ・佐々木聡『復元白沢図：古代中国の妖怪と辟邪文化』（白澤社、2017年）
- ・山口県文書館・平成29年度第1回資料小展示解説資料「よって件（くだん）のごとし—予言する正直な怪物—」（毛利家文庫19日記18「密局日乗」67）

http://archives.pref.yamaguchi.lg.jp/user_data/upload/File/small_exhibition/H29-01.pdf（最終閲覧日2021.2.19）

佐々木聡：

- ・川野明正『神像呪符「甲馬子」集成：中国雲南省漢族・白族民間信仰誌』（東方出版、2005年）
- ・佐々木聡「異と常：漢魏六朝における祥瑞災異と博物学」（東アジア恠異学会編『恠異学の地平』臨川書店、2018年）
- ・佐々木聡「神獣白沢と治病祈願」（『鍼灸 OSAKA』130、2018年）
- ・佐々木聡『復元白沢図：古代中国の妖怪と辟邪文化』（白澤社、2017年）
- ・鄭燦山主編『道法海涵：李豊楙教授暨師門道教文物收藏展』（新文豊出版、2013年）

Trilok Chandra Majupuria and Rohit Kumar Majupuria, *Gods, Goddesses & Religious Symbols of Hinduism, Buddhism & Tantrism: Including Tibetan Deities*, Kathmandu, Rajni Book Service, 2017

- ・臺灣文化部《臺灣大百科全書》，張詩瑄〈甲馬〉,2009年9月，
<https://nrch.culture.tw/twpedia.aspx?id=12132>（最終閲覧日2021年）
- ・《國史館臺灣文獻館電子報》第195期,2020年6月，楊心如〈你有聽過天貺節嗎？〉
<https://www.th.gov.tw/epaper/site/page/195/2700>（最終閲覧日2021年2月19日）

村上紀夫：

- ・井上智勝『近世の神社と朝廷権威』（吉川弘文館、2007年）
- ・井上智勝「近世の易占書」（笹原亮二編『口頭伝承と文字文化—文字の民俗学・声の歴史学』思文閣出版、2009年）
- ・落合延孝『猫絵の殿様：領主のフォークロア』（吉川弘文館、1996年）
- ・小池淳一「民俗書誌論」（須藤健一編『フィールドワークを歩く』嵯峨野書院、1996年）
- ・宮内貴久『家相の民俗学』（吉川弘文館、2006年）
- ・村上紀夫『近世勸進の研究』（法藏館、2011年）